

# 電子に意志が有るとする進化論

氏名 山田廣成

所属 立命館大学理工学部

生命が何かは誰も定義をしていない。生命と非生命の境界が薄れている今日であるが、生命の定義をしていないから境界が定かでないのは当たり前である。一方で生命現象と言えれば様々に指摘できる。例えば、呼吸し代謝を行うのが生命現象である。分裂して子孫をつくること、死に至る寿命を持つこと、雌雄が存在すること、進化する等々があり、これらの総称が生命現象である。私は量子論に基づき電子に意志が有ることを導いている[1]が、電子の意志は当然生命現象を担っている。電子は自分の進むべき未来を自ら決定し、ひいては個体の未来を決定しているという点で生命現象の一部である。こうして生命と非生命の境界は消失した。

細胞には意志が有り、それぞれの意志で共生する細胞が個体を形成しているという発想は、電子に意志が有れば当然派生する考えである。新しい進化論は、電子に意志が有り、細胞に意志が有ることをどの様に組み込むかが重要な課題となる。

進化に系統があることは、今日誰もが同意することであり、DNA の発見により、それは非常に確かなものになった。しかしながらダーウインは進化が起こる原因を特定しなかった。そこで、突然変異と突然変異により発生した優秀な種が、劣性の種を淘汰したというのが主な見方だ。しかし、量子力学の意味が明らかになった今、この進化論は本当に正しいだろうか？ 淘汰が起こるのは自然の摂理だろうか？ [2]

そもそも進化が適切な方向に進むと考える理由は何処にあるだろうか？ 突然変異で起こる進化が他者を淘汰する結果、それは常に正しい方向に進化するという保証があるのだろうか？ 強い種が誕生することが進化だろうか？ 突然変異を原動力とする進化はそこが疑問だ。一方、意志による進化は何故起こるか？ 種を保存し永続するために起こるのではないだろうか？ 他者を淘汰するために進化するだろうか？ 共存するために進化するのではないか？ 自然環境が激変するとき、変化に対応するために進化するのでは

ないだろうか？

ダーウインは、新しい種が突然変異で生まれ、これがたまたま環境に適合して繁殖し、古い種を駆逐したと言っている。しかし長い自然史を見ると、種はむしろ共存している。自然のサイクルの中で、捕食する種と、捕食される種が有るが、捕食種が捕食される種を絶滅することは無い。絶滅させたら、自らも滅びることになる。多くの種を絶滅させたのは人間である。人間がもたらしたあまりにも大きな環境変化が種を絶滅させ、現代にも引き継がれている。

下等生物では、抗生剤に対抗してどんどん強力な菌が繁殖している。しかし、これは突然変異だろうか？ 菌が自らを意識的に変化させたということが無ければこれほど迅速に、抵抗力のある菌は生み出されない。粘菌は単細胞生物だが見事なネットワークを示す。種として存続する道を選び情報を共有している。全ての個体は、私たち人間が思うより遙かに優秀である。小さな脳の小鳥でさえ、人間を認識して人間との対話を試みる。粘菌は、互いに共同して社会を作り、まるで全体で一個の意志のある個体のように振る舞う。

恐竜の或る種が自らの意志で空を飛ぶ訓練をして鳥になった。カバの或る種が自らの意志で深海へ潜る訓練をして鯨になった。彼らは自らの意志によってその能力を獲得したと考える方が妥当である。突然変異でインテリジェンスを獲得することはあり得ない。人間が日々なしている様な努力を、鳥や鯨が行わないと思うのが不自然である。突然変異で鯨が誕生し、突然変異で恐竜が空を飛ぶようになったと思うのは拙劣である。各個体の意志により、たゆまぬ努力により獲得した進化である。意志の概念は極めて重要なかつ必要な 21 世紀の概念である。

意志で進化する進化論の研究を期待したい。

[1] Some comments on the real meaning of Schrodinger equation revealed by the fact that electron is always a particle”, Hironari Yamada, *Journal of Quantum Information Science*, 2012, 2, 112-118 doi:10.4236/jqis.2012.24017 Published Online December 2012 (<http://www.SciRP.org/journal/jqis>)

[2] 「量子力学が明らかにする存在、意志、生命の意味」、山田廣成、(光子研出版) 2011年11月30日、ISBN978-4-9906198-0-0